Bluff Archives News Letter

第8号　2026年11月17日
発行　　NPO法人横浜山手アーカイブス

グラシアニ夫人（ラフィン家の四女・マーテルさん）のこと



グラシアニさんと愛馬（個人蔵）

今夏、数奇な運命を辿った古い16㎜フィルムの映像が日の目を見た。牧場で放牧される馬、障害レースに挑む馬、そして小さな犬を大切に扱う女性など‥‥。フィルムは、10年ほど前、神戸の動物愛護家の方より、当NPO法人の小澤理事長が当時館長を務める山手資料館へ送られてきたものだった。

フィルムを撮影したのは、山手111番館（ラフィン邸）を建てたジョン.E.ラフィン氏の妹、 マーテル・ラフィン・グラシアニさん。マーテルさんは、両替商などを営むトーマス.M.ラフィン氏と日本人の妻・ミヨさんの四女として、1899年10月９日横浜に生まれ、2001年7月神戸で亡くなっている。マーテルさんとはどんな人だったのだろうか。

動物を愛するグラシアニ夫人

マーテルさんは、神戸の領事館で働いていた20代の頃、フランス人貿易商ロバート.J.グラシニア氏と出会い、結婚して神戸に住む。グラシニア氏の両親は、神戸元町でダイヤモンド宝石商を営む富豪だったと言われる。住まいは、神戸北野にある1908年に建てられたコロニアルスタイルの優美な白亜の洋館であった。

フィルムには、お手伝いさんが布で包んだ小犬を大切そうに洋館の庭に連れてくる、その様子を夫人が嬉しそうに眺めている映像がある。妹のミルドレッド・ラフィン（OKU）の姿も見える。夫人はどんなに手に負えない犬でも優しい声で「ハーイ、キュートガール、カモン、レッツ・オネスト」と呼びかけ、手懐けてしまう特技の持ち主だったらしい。

昭和30年代初頭、英国大使夫人や堀口イワさん（詩人堀口大學氏の令妹）たちは大学医学部の実験動物置場で酷い扱いを受けている犬たちの待遇改善を求めて活動を始め、これが日本における動物福祉の始まりとされ、日本動物福祉協会の立ち上げに繋がる。夫人は当初からこの活動に加わり、神戸で動物愛護に力を注いだと言われている。

グラシアニ夫人と愛馬たち

大の馬好きだったグラシアニ夫人。その人柄を物語る新聞記事がある。戦後まもなく、かつてはオリンピック馬術競技で優勝したこともある名馬・シャムロックが脚を痛めた時、この馬を引き取り、手厚く手当したのが、グラシアニ夫人だった。その頃、皇居の二の丸にあったパレス乗馬倶楽部で、グラシアニ夫人がシャムロックの手綱を取り、堀口イワさんと倶楽部の最高顧問 遊佐幸平氏と映る写真もある。

グラシアニ夫人は馬を数頭所有し、北海道で飼育してもらっていた。牧場は、当時北海道浦河町にあったオーシァン牧場（後のイーハトーヴ・オーシァンファーム）。場長は大井昭子さん、当時として珍しい女性場長であった。大井さんは1983年に競走馬の生産をやめ、馬たちが穏やかに余生を過ごす養老牧場へと転換を図る。１億円を送金して馬の養老院を建ててほしいと願っていたグラシアニ夫人は「よくやってくれた！良いことをしてくれた」と喜んだそうだ。夫人の愛馬ダイナトパーズもこの牧場で余生を送ったとされる。

グラシアニ夫人は、夫が1984年に亡くなると自邸を売却。洋館は改装され、「グランメゾン グラシアニ」というレストランがオープンする。夫人は、近くの小さな洋館を借りて住み、毎晩のようにレストランに通い、夕食を召し上がり、「私の名前を残してくれてありがとう」と言われたそうだ。

グラシアニ夫人は、晩年まで神戸に住み、90歳を過ぎてもお元気で動物福祉のために貢献されたという。2001年に神戸の病院で亡くなると、子供のいなかった夫人は、遺産を動物愛護に使って欲しいと遺言を残したが、なぜか口座から預金は消えていた。管財人は写真アルバムやフィルムなどの遺品を北海道のオーシァン牧場に送っており、足跡を辿っていた動物愛護家の方は、大井さんの後を継いだ歌代場長から写真等の資料をもらい受けたのである。

グラシアニ邸は、2012年に火事で全焼するが、翌年再建され、本格的なフレンチが堪能できるレストランとして人気を呼んでおり、ここへ来れば、今もグラシアニ夫人の面影を偲ぶことができる。（N）

※本稿は、神戸在住の動物愛護家の方への聞き取りをもとに構成した。